

どもる子どもと、ことばの教室の卒業を考える

千葉市立院内小学校 渡邊美穂

1 はじめに

本校のことばの教室には、11名のどもる子どもたちが通ってきている。それぞれ個別に週1回の学習と、全員が集まる月1回のグループ学習を行っている。グループ学習では、1年生から6年生の子どもたちが、やグループ学習で吃音を話題にした話し合いや、表現活動を中心に取り組んでいる。その中で子どもたちが、自分や吃音について「語る」ことを大切にしている。

これまでの活動や学習を通して、ことばの教室を「卒業」することは、どのようなことなのかと個々に考え、取り組んでいることを紹介する。

2 表現活動

(1) どもりカルタ

大人が作った「どもりカルタ」の読み札を知って、思いを寄せたA児がいた。2年生の3月から通級している5年生の子である。A児とは、人とのかかわりについて、たくさん話し合ってきた。その思いを「どもりカルタ」に込めて作ることになり、5年生の2月からカルタ作りに取り組んだ。文章を書くことが苦手だったA児とは今まで短い文をつなげて作文を作ったり、詩を書いたりする取り組みを行ったことがあった。今回の取り組みでも、短いことばで仕上げる「カルタ」は、あまり抵抗なくはじめることができた。

はじめに、どのような内容でどんな思いをこめて作るか話し合った。どもる瞬間の気持ちや、まわりの反応にドキドキすることが多かったA児としては、どもることに対する前向きな気持ちや、どもってもいいんだという思いを表現したいと言っていた。カルタで遊んだ後に、気持ちよく終われるようなカルタを作ることにした。

ちなみにA児は、どもることに対して「治したい」「治ったら〇〇したい」という気持ちを強くもっていた。どもる恐怖から、ことばで話すことよりも態度で示してしまい、周囲の誤解をまねくことも多々あった。そのためいろいろな人とトラブルになり、叱られ、ふてくされ、「どうせ、わかってもらえない」と、あきらめるようなことばをつぶやくことがあった。また、家族は、良き理解者であるとわかっているにもかかわらず、つい八つ当たりをしてしまい、なんとなくうまく自分の気持ちを伝えることができなかった。ことばの教室では、自分の思いを話す時間として使うことが多かった。いろいろな人への言えなかったことや不満を話していた。私は、A児が落ち着くまで話をよく聞いた。言い終わってからは、A児の話を整理し、A児の言動を振り返るような声かけをした。A児は、相手に自分の気持ちを伝えることは難しいが、しなくてはいけない大事なことであることはわかっていた。でもうまくできなかった。A児のそんな不器用なところがかわいいところでもあったが、何とかしなくてはいけないところでもあった。A児といろいろな思いを話したり、書いたりして表現する学習を行い、その集大成であるカルタに取り組もうとしていた。

カルタの作り方は、「あ」のつくことばをたくさん書き出し、そこから自分のエピソードを思い浮かべて文章をつなげた。「あ」、「あいて」、そうだ！「相手と一緒にごあいさつ」と、スラスラと書きだした。その後、その内容の意味を聞いた。A児は、難発ではじめのことばがでにくかった時、相手が「おはようございます」と言ってくれれば、それに合わせてうまく言えたことを思い出した。特に母音から始まる「おはようございます」は、言いにくかったと話していた。「相手がなかなかあいさつしてくれないと、こっちも言えなくてさ」と更に笑いながら続けた。私は、カルタを作りながらA児の話を書くことがとても楽しかった。カルタを作る時も、気持ちのよい時間となった。週一回の通級で、しかも6年生となると、忙しくてなかなか通級できず、進まなかった。けれども、10月に完成した。

読み返してみると、家族をはじめ周囲の人々に対する感謝の気持ちが多いことに気がついた。そういえば、カルタを作りはじめてからトラブルになったことや、嫌だったことを話すことがなかった。気持ちも穏やかで、安定し、なによりA君の思いをまわりに理解してもらっていると思った。また、「ろ」の「ロボットみたいな話し方、ぼくは絶対つかわない」は、どもりたくないと言っていた時に、一言一言ゆっくり、かるく伸ばしながら話す方法を取り入れ、録音してみた。普段の話し方と比べて、「確かにどもらなかつたけれど、ロボットみたいだ」と言っていたことを思い出して作った。どもりたくない、治したいという思いは、まだあるようであるが、通級を始めた頃と、気持ちは変化したように思う。

そして、「に」「にくらしい 陰でコソコソまねしてる」では、まねされた時のことを思い出して書いた。カルタ作りのスタート時は、嫌なことは書かないと話していたが、「こんなこともあったな」と思い出すエピソードの一つとなっていた。気持ちの変化は、かなり大きいと感じた。

作品ができる中で、生活環境も変わってきたと感じた。地域の野球チームに入ったり、グループのリーダーになったりいろいろなことに積極的に参加できるようになっていた。宿題をはじめ、勉強もがんばって行く子になった。カルタが出来上がった時、気持ちを表現できたと実感し、清々しい笑顔のA児であった。

年に一回のことばの教室の発表会で、他の通級の子たちの前でカルタを発表した。反響が大きく、他の吃音のある子どもたちが自分も作ってみたいと話していた。A児だけの取り組みではなく、吃音のある子への大きな一歩となった。

A児は、6年生の12月に、ことばの教室を卒業した。その時私は、これからも、いろいろな経験の中には嫌なことも困ることもたくさんあると伝えた。その時A児は、「そうなったら、相談する。先生にも連絡するよ」と言ってくれた。「先生にも」のことばには、たくさん相談する人がいるとういことだとうれしくなった。そして、ことばの教室がなくてもいいという表れであることに、卒業を確信した。

私は、「どもりを治す」ことはできないけれど、「どもる」ことについて一緒に考えたいと思ってきた。その中で、私が子どもたちから「どもる」ことを学ぶことも多かった。吃音症状にだけふれるだけのかかわりでは味わえないような感動をたくさんもらった。

(2) 吃音キャラクター

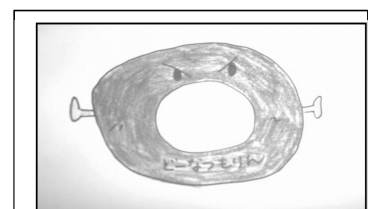
B児は、1年生からことばの教室に通級していたが、あまり悩んだり困ったりした経験がなく、親の不安や心配の方が大きかった。しかし、3年生や5年生など、2年に一回のクラス替えでの

自己紹介が不安になったと相談をしてきた。「自分の名前が言えない」「なぜ、他の名前ではなかったのか」と何度も泣いた。B児は、母音やタ行音が苦手であるがその両方が名前に入っていた。これまで、音読や会話などあまりどもることがない様子であったが、名前だけは「工夫できない」と言っていた。ことばを置き換えたり、出だしが言いにくいことばの音読は、前の文章の語尾を続けて読んだりしていた。自分なりの工夫をしていたようだ。しかし、自己紹介は、そうはいかないと泣いていた。私は、そんな不安を解消するために、月一回のグループ学習で毎回自己紹介をする時間をもった。しかし、お互いにどもる仲間であることや、慣れた場ということが新しいクラスや友だちの前との違いであるため、あまり意味がなかったかもしれない。けれども、自己紹介は名前だけではなくお互いの好きなことや嫌いなことを知り合うことであることを、私は知らせたくて毎回続けていた。B児は、始めは名前を言わなかったり、遅れてきたりして自己紹介を避けるような様子があったが、次第に堂々とどもりながら名前を言うようになっていった。

そのきっかけになったのが、「吃音キャラクター」だったかもしれないと感じている。自分の吃音のことをこれまで語ってこなかったB児が初めて進んで話すようになった。「吃音キャラクター」とは、自分の中にどもらせる原因があるとしたらどんなものなのか形で表してみたものである。目に見えないものを自分の想像で描いてみた。B児はもちろん他の子どもたちにも取り組んだ。どの子もすぐに描き始め、そのキャラクターについて語りだした。B児は「ドーナツのような形をしていて、喉の側面に張り付いている。時々超音波を出して、私をどもらせるんだよ」と面白そうに語っていた。その「吃音キャラクター」に「どーなつもりん」と名前を付けた。そのどーなつもりんに対して始めは「あっちに行け！」と言いたいと言っていたB児が「まあ、私の中にいてもいいか。しょうがない」と思えるようになった。自分の中の吃音を絵に描いたりフェルトを使って作ったりして外在化した。そして、自分の吃音を眺めたり触ったりしているうちに親しみを感じたようである。そのことから、自分の吃音に対する思いや考えを語るようになり5年生の2月にクラスの友だちにことばの教室に通っていることや、どもることなどを語った。友だちがB児に対してあたたかく受け入れてくれたので、B児は自分に自信がもてるようになっていった。

6年生になり、3月の卒業を迎える頃には自分自身についての考えや思いをまとめ、ことばの教室の発表会で発表した。その中で「私の夢は、芸能人になることです。私はどもるけど芸能人になります。名前は、言いやすいことばで芸名にします」と笑顔で語っていた。自己紹介に悩んだことも自分なりに、解決していると私は、感じた。

その後、ずっと心配してきた中学校生活も順調であると連絡があった。「自己紹介もなんとかクリアした！毎日が楽しくて！」とB児からうれしい電話での報告があった。B児のように悩むことも大事な成長であると感じた。



B児の吃音キャラクター

「どーなつもりん」

喉の側面の張り付いていて、真ん中は、食べ物が通る。時々、超音波を出す。

(3) 詩を書く

自分の気持ちを詩や替え歌にしている子がいる。「どもっても大丈夫」という詩を作った5年生のC児は、とても予期不安が強く、まわりからいろいろな係に推薦されて「もし、どもったら」

と断り続けてきた。まわりからは、あまりどもることがないと思われていたが、自分の中で言いにくさを感じていたようである。しかし、勇気をだして「6年生を送る会」という学校行事の実行委員になり、全校の前で話すことができた。C児の感想は「少しどもったけれど、やりきることができた」だった。「これからも何かするたびに予期不安はあるけれど、なんとかやりきれそう」と、グループ学習の仲間に伝えて、ことばの教室を卒業した。

これまで、6年生までことばの教室に通うことが当たり前のように思っていた他のどもる子どもたちにとって、驚く出来事であった。しかし、その清々しい様子に納得して「グループ学習の仲間がいなくなるのはさみしいけれど、おめでとうと卒業をお祝いします」と仲の良かったD児が手紙を書いて渡していた。

「どもっても 大丈夫」 5年C児

前の私は、悩んでいた
どもって なかなか言えなくて 悩んでいた
どもることが 迷惑じゃないか
どもらないかと 予期不安があって 悩んでいた

今の自分は 大丈夫
どもって なかなか言えなくても 大丈夫
だって 待ってくれる みんながいるから 大丈夫
どもることが 迷惑じゃないって
わかったから 大丈夫
だって 丸読みの時も 待っててくれた
予期不安があっても 大丈夫
だって 私は やり通すことができたから
大丈夫

(4) 当事者研究

C児の卒業を見送った子どもたちが「ことばの教室を卒業」について考えるようになった。どうなったら卒業なのか話し合った。「音読は、どもっても最後まで読むようになったら」「発表も逃げずにやりきれたら」などの声があがった。そして、子どもたちはそれぞれに今の気持ちを維持しようと思っても、気持ちや吃音症状に波があることを理解している。そこで、今の前向きな気持ちや考えを未来の自分に伝えたいと考えた。自分の不安を予想し、今の自分が未来の自分にアドバイスし、それを書きためてファイルをすることにした。これは「当事者研究」である。自分のことを客観的にみたり考えたりしながら、自分について研究し、語る。このような取り組みが自然に子どもたちの中から提案されてきたことに驚いた。そして、書きためたそのファイルのネーミングも考えた。個々に考えたネーミングは「未来の私へのメッセージ」「ぼくのバックフューチャー」「人生の攻略本」などである。特に、「ぼくのバックフューチャー」は、映画のように未来や過去に自由に行き来するイメージである。今の自分が、未来の自分にアドバイスをし、未来の自分が、過去の自分を振り返るということである。「人生の攻略本」は、人生の困難をなんとか乗り切ろうと考えたようである。最近、取り組み始めたのでまだ完成はしていないが、自分のことを知り、考え、語ってきた子どもたちだからこそまとめていけると確信している。

4 おわりに

これまでの取り組みから、子どもたちの思いや考えは、とても豊かになってきたことを実感している。子どもたちが吃音について語ったり、表現したりすることで更に、自分の考えや思いを整理し、自分の卒業を考えている。子どもたちは、吃音のついて学び、考えてきたが、卒業時は自分の人生について考えていることがわかった。これからも、いろいろなことにぶつかりながらも、胸をはって人生を生き抜いてほしいと願っている。